炭鉱の記憶と記録を未来につなぐ

熊谷　博子（映像ジャーナリスト）

私はこの 20 年近く、炭鉱にまつわるドキュメンタリー映画や TV 番組を多く作ってきた。東京に生まれ育ったので、炭鉱のことはまるで知らなかった。炭鉱との出会いは偶然である。でも初めて出会った時から、炭鉱が持つ不思議な力に魅せられた。そして「なぜ、今さら炭鉱なのか？」と、多くの人に聞かれ続けてきた。私は、「そこに日本が埋まっているから」と答え続けてきた。

日本最大だった三井三池炭鉱は、1997（平成 9）年 3 月に閉山した。その翌年だ。三池炭鉱のあった福岡県大牟田市から依頼がきた。「歴史を生かしたまちづくり」というシンポジウムに、パネラーとして来てくれないか、と。次のように説明された。

市内には、炭鉱が残した近代化遺産が点在している。炭鉱で生きてきたまちで、市民は閉山によって誇りを失っている。貴重な歴史的建造物を活かし、市民が再び自信を取り戻すことはできないだろうか。

私が、『ふれあうまち　向島・オッテンゼン物語』（1995）という映画を作っていたからだった。東京と独・ハンブルクの二つの下町で、住民どうしが交流を続け、古いものを壊さずに活かす、ユニークなまちづくりをしている姿を描いた。特にオッテンゼンではまちの歴史を残すため、廃業した工場を、機械の一部もそのまま活かしながら、劇場やレストランに改造していた。

私は、三池炭鉱のあった大牟田市を訪れた。初めて炭鉱跡に足を踏み入れた時の衝撃は、今も身体にありありと覚えている。秋だった。遠くから、赤煉瓦の建物と、空高くそびえる鋼鉄のやぐらが見えた。胸元まであるような草をかき分け、敷地内に入ると、足元から、働いていた人の声が本当に聞こえてきた気がした。すばらしいものに出会ったと感じ、瞬時にここを撮りたい、と思った。宮原坑跡だった。その後 2015（平成 27）年に、「明治日本の産業革命遺産」群の一つとして、ユネスコ世界文化遺産畏に登録された。次いで、同じく世界遺産となる万田坑跡や三池港を訪れ、興奮した面持ちでシンポジウムに臨んだ。

撮りたい、残したいと発言すると、市民の方から「三池には“負の遺産”があまりに多いので、閉山もしたことだし、すべて忘れて次へ行ってはどうか」との声があがった。あれのどこが“負の遺産”なのか。ショックと同時に怒りを覚えた。その時点で、私が三池炭鉱の歴史を詳しく知っていたわけでなない。三池炭鉱は江戸時代半ばから掘削され、明治政府の官営炭鉱となり、1989 年（明治 22）、三井に払い下げられた。官営時代の始めから囚人労働が行われ、そして与論島から集団移住させての差別労働。戦争中の朝鮮人、中国人への強制連行・強制労働、連合軍捕虜への強制労働。戦後は、「総資本対総労働」と言われ、日本中を二分した三池争議。さらに、458 名の死者と 839 名の一酸化炭素（CO）中毒患者を出し、戦後最大・最悪の労働災害となった炭じん爆発事故と、すさまじい歴史がある。でもそれは、日本が歩んできた道そのものであり、それを“負の遺産”として消し去れば、日本の歴史そのものを消すことになるのではないだろうか。何よりも、そこで必死に生きて働いて闘った人々の姿はどうなってしまうのだろう、と思った。それが炭鉱を記録するきっかけだった。

シンポジウムから 3 年後、同じ思いを抱いた大牟田市石炭産業科学館・職員の奮闘で、「こえの博物館」と名付けた、市の記録プロジェクトが始まった。その後 2 年間に渡り、三池炭鉱が残した主要な建造物、稼働を続けている港や炭鉱電車、炭鉱に生きた様々な立場の、約 100 人の証言を撮影した。死と隣り合わせの危険

な場で働きぬいた人々の体験と誇り、強制連行・強制労働をさせられた韓国人、中国人、元アメリカ人捕虜の証言。職業病であるじん肺にかかり、懸命に生きようとする人。炭じん爆発事故で CO 中毒になり、暴力をふるうようになったり、物忘れがひどくなった夫を抱え、今も闘い続ける妻たち。初めて明かされる、三池争議の裏側。会社側の人も組合側の人も、時がたったからこそ言える、赤裸々で正直な証言だった。このプロジェクトから、4 種類 6 作品が生まれた。現在も、市の石炭産業科学館で定期上映されている。

最も長い作品を、初めて市民の前で上映した時のことは忘れられない。500 席のホールに立ち見も出て、上映が進むとともにあちこちから嗚咽がもれ、涙が伝搬し、最後は半数以上の方が泣いていた。チキショーという声も聞こえた。大争議でまちは二分され、住民どうしが激しく闘ったしこりが、まだ根強く残っていた。当時の敵、味方が初めて同じスクリーンで証言し、事実が分かった瞬間でもあった。

さらに、全国で上映するために再編集し、映画『三池　終わらない炭鉱（やま）の物語』（2005）を完成させた。私が初めて炭鉱跡に立ってから、7 年たっていた。その時の“こえ”の衝撃と“負の遺産”という言葉のショックの掛け算がなければ、ここまでしつこくはやれなかった。

東京の上映館で、私は、予想を超える多くの観客から、「作ってくれてありがとうございました」と声をかけられた。三池だけではなく、他の炭鉱町出身の方からも、これで自信と誇りをもって、自分が育った町のことを言える、と。また、鉱山のあった町で育ち、閉山という言葉が、お前らいらないよ、と言われた気がして、自分の生い立ちを恥ずかしくて知人に話せなかった。でもこれからは堂々と話せる、と語った女性もいた。

この映画を、地元有志の手で数年間、閉山の記念日前後に必ず上映していた。当時女子大生だった人からの忘れられないアンケートがある。

母に連れられ、いやいやこの映画を観に来た。閉山後の町しか知らず、つまらないさびれた町だと思っていた。でもこの映画を見て、信念をもって素晴らしい生き方をした人がいたことを知った。自分は教師を目指しているが、教師になっても母になっても、子どもたちに町の歴史を伝えていきたい。

次に、映画『作兵衛さんと日本を掘る』（2019）を作った。残した絵と日記など 697 点が、日本初のユネスコ世界記憶遺産に登録された、筑豊炭田の元炭坑夫、山本作兵衛をめぐる物語である。

筑豊炭田は、福岡県北部の川沿いに広がった。多い時にはここだけで、大中小合わせて 280 もの炭鉱があった。たった一つで日本最大であり、海に面し港を持っていた三池炭鉱とは、異なる世界である。

作兵衛さんは、幼い頃から両親について坑内で働いた、生粋の炭坑夫である。専門的な絵の教育は一切受けていない。子や孫たちに炭鉱の労働や生活、人情を伝えたいと、60 代半ばから本格的に絵筆を握り、2000 枚とも言われる絵を残した。明治、大正、昭和初期の、炭鉱で働く人々の姿である。

暗く暑い地の底。ふんどし一丁でツルハシをふるう男と、上半身は裸で、100 キロもある重い石炭かごを曳く女。最も過酷な労働のはずなのに、男たちは身震いするほどたくましく、女たちは艶っぽい。見る度にドキドキする。多くは夫婦であった。天井が落ちてくれば逃げ場もない穴の中、互いに命を預けあった労働である。

作兵衛さんの残したものが世界記憶遺産に登録されたのは、2011（平成 23）年 5 月 25 日。奇しくも、東日本大震災と原発事故からわずか 2 か月半後のことだった。

日本では、炭鉱の衰退と原発の建設は軌を一にしている。炭鉱のあった

場所に、原発ができたケースは多い。福島原発は、本州最大だった常磐炭田の北側に建設され、南側に東海原発が建設された。国策の中で、労働者は翻弄された。特に貧しかった筑豊では、仕事を失った炭坑夫たちは出稼ぎの原発労働者になっていった。

そうした事実も映画内ではふれているが、今回のシンポジウムでは、英語字幕版を 10 分間に抜粋編集して上映した。中心は、作兵衛さんの絵の紹介と、元おんな坑夫のカヤノばあちゃん（橋上カヤノさん）の証言である。

日本にはかつて、沖縄から北海道まで 900 もの炭鉱があった。そしておんな坑夫は各地にいた。1932（昭和 7）年、法律によって女性の坑内労働は禁止される。だが、中小炭鉱の多い筑豊では他に働き場所はなく、戦後も数年は、おんな坑夫たちの労働は違法で続いていた。104 歳になる元おんな坑夫のカヤノばあちゃんに会えたのは、奇跡に近かった。暮らしていた老人ホームを訪ねた。当時の石炭カゴを探して持っていくと、立ち上がって、小さな体に籠を背負い、坑内ではこう働いたとやって見せる。

「懐かしいなぁ。石炭を入れるやり方あるとですよ。炭車の函に、上からバラバラ〜っと、ザルで流し込むように入れてね。函が高いから台に乗って片足あげてこうして落とすんですよ。初めは皆、函の中に石炭と一緒に入りよった。先山さん（さきやま　石炭を掘り出す人）に声かけて、引っぱってもろうて。私はそんな不調法な事はせんやったけどね」

9 歳の時、愛媛県の山あいの村から一家で筑豊へ来た。19 歳で結婚、夫とともに坑内で働いた。8 人のこどもを産むも、すぐに一人を失い、戦後は貧しさの中で、6 人の子どもを次々に亡くした。夫はビルマの戦場から、片腕ともう一方の手指を失って戻ってきた。そんな夫を支えて働き続け、夫と、最後に一人残った子どもにも先だたれた。筑豊から炭鉱はなくなり、失業対策事業の建設現場などで働いて生きてきた。

「長生きもしたが、やっぱり貧乏が一番力になってくれた（笑）。私にとっては今が一番、もう頂上です。貧乏をして悲しみにあうし、いろいろ人からもこなされた（あしざまに言われた）けど、負けとらんきね。口では言わんでも腹ではね」。

穏やかな笑顔の中に、地の底の労働を生きぬいた女の誇りが伝わってきた。長生きをしてくれて話が聞けたことに、心から感謝した。でもその背後には、坑内で亡くなった赤ん坊から老人に至る名もない無数の人々がいる。105 歳の誕生日まで撮らせていただき、その 2 週間後に亡くなった。

私がこの映画を制作しながら強く感じたのは、炭鉱で働く人々への差別であった。作兵衛の孫である井上忠俊さんは、田川市で生まれ育ち、福岡市内の大学へ行った。

「皆さんの前で「筑豊・田川から来ました」と自己紹介をした時に、何かいやな冷たいものを感じた。後に友だちが、「田川ってこわいんやろ」みたいなことを言うんですよ。「そういったものを一切感じたことはないし、住めば楽しいところだよ」って言い続けていたものの…。長年、自己紹介の時に「福岡県の北部エリアで商売やってます」とか妙に濁して、筑豊だとか田川だとかを言わずにいたような気がしているんです。当時炭鉱で苦労した人たちのおかげで今の私たちの生活があることを考えれば、何ら恥じることはないんじゃないか、と思うようになったのは、作兵衛の残したものがユネスコの記憶遺産になったからだったのかもしれない。心の中では恥じることはないと思いながら、どこかに言わずにおこうとしていた自分に対して、反省している」

私がこの言葉を聞いたのは、撮影を始めてから実に 5 年もたった時だ。

筑豊の記録作家、上野英信の長男、上野朱さんにも、町役場での体験がある。結婚して新たな本籍地をつくる際に、原点である自分の育った場所の番地を書いた。

「住民課のベテランらしい職員さんが、出した書類を持って来て、「実はこの番地なんですけども…」ってちょっと声を落として言うんです。「この番地は、炭鉱のあった場所です。だから、お避けになった方がいい

んじゃないですか？」

炭鉱を示す番地や地名は、できれば避けるものなんだなぁ〜と、その時はじめて体感した。自分たちにとっては、一番差別されそうなところにしたい。「これでいきます」と。「気の毒に」というような表情で、書類を受理してくれたそうだ。

作兵衛さんが、晩年に記した言葉が胸にしみる。

「けっきょく、変わったのは、ほんの表面だけであって、底のほうは少しも変わらなかったのではないでしょうか。日本の炭鉱は、そのまま日本という国の縮図に思われて、胸がいっぱいになります」。

それから 50 年。果たして日本は変わったのだろうか。作兵衛さんが描いたのは、かつての炭鉱の姿だが、私には現代に思えた。特に同じエネルギー産業である原発は、その労働構造は全く変わらない。

なぜ、炭鉱を撮るのか。その中に、日本という国がつまっているからだ。イギリスからの参加者の報告や、実際に話してみて、炭鉱の記憶と記録を未来につなげる試みが、しっかりできていることを感じた。改めて、事実と向き合い誇りと共に伝える大事さを思い知った。